「桜を見る～自分を見つめる」

●桜を見る

桜咲く頃となりました。東日本大震災の年も、昨年も、今年も、いずれの年も同じ桜が春霞の中にきらめいています。

福島第一原子力発電所の炉心融解（メルトダウン）事故、公文書改ざん･公務員の自死、桜を見る会、新型コロナウイルス感染の拡大などなど、様々な出来事が起きると、同じ桜でも私たちにはその見え方が変わります。

桜ばかりではありません。自分の周りに起きる出来事は、その人のものの見方を変えていくともいえるでしょう。

「初々しいいいのちが誕生した」、
「年をとって認知度が低下したり介護が必要になった」、
「気づかぬうちに病状が進行していた」、
「身近な人が息を引き取った」

など、思いもよらぬ出来事は、私たちの歩みを踏みとどめ、生･老･病･死の事実を見つめさせることになります。

しかし、それは同時に自分を、そして、自分のものの見方を見つめるきっかけになっています。

いつも見ているつもりのものを、改めて見直すということは、今まで見過ごしていたものの見方を恵まれる、あるいは、今まで気づいていなかったことに気づかされる、ということです。

しかも、周りの出来事に大きな**影響を受けたからこそ、そのものが見えてきた**ということになります。さて、今年の桜は、どのように見えているでしょうか。

●ほとけはつねに

「仏は常に　いませども
　うつつならぬぞ　あはれなる
　人の音せぬ暁に
　ほのかに夢に　見え給ふ」

これは、平安末期に編まれたという『梁塵秘抄（りょうじんひしょう）』の一首で、法文歌（ほうもんか）に分類されます。法文歌とは、文字通り、法文、仏法の味わいを歌に詠んだものです。

「ほとけさまは、いつでもおいでになるのに、
　現実のお姿としては現れないのが、とても趣きの深いことです。
（それは）ひと気のない暁（あかつき）に、
　かすかに夢に現れる（ような）ものです」

と私は受け止めています。

仏教にご縁のある者は、仏さまという言葉を口にし、仏さまという名を当たり前のように聞いています。しかしながら、本当の仏さまが私に現れる、本当に仏さまに出遇うということは、とても有難いこと、有ること難いことではないでしょうか。

親鸞聖人の教えを頂く者にとって、仏さまと出遇うことを信心を開くともいいます。

信心とは、インドの原語では、チッタ･プラサーダといい、チッタ（心）がプラサーダ（澄浄、歓喜）になることです。今まで濁っていたので気づかなかったけれど、澄んできたことで気づく心です。それは、見えなかったことが見えてくるようになるのは、歓喜をともなうということでもあります。

私たちが、本当に仏さまに出遇うのは、今まで見過ごしていたもの、気づいていなかったことに気づかされて、ああそうだったなあ、常に仏さまはいらっしゃるのに、この私は気づいていない生き方をしていたなあ、という実感を恵まれたところに成り立っていると言えるでしょう。

それは、今まで見ていながら、実は見えていなかった桜が、この私のいのちの上に見えてくる実感に似ているように思いました。

●この世のできごとは何事も念仏申す助縁

同じものが、その時その時、自分が体験することを通して、今まで気づかなかった深い尊いものとして見えてくる、知れてくるのならば、私にとって、仏さまに出遇うきっかけとなったものは何でしょうか。

身近な所でいえば、仏壇、本堂、名号、仏像、法座、最近ならオンライン法話などです。ところが、ものの見方を変えてくれるのはそればかりではありません。

冒頭に掲げた通り、今まで、無駄で、邪魔で、無価値で、無ければよいと思っていた出来事も、実は、私を気づかせるきっかけになっています。

さらに考えると、私が念仏を生活習慣として称える身に育てられていなかったならば、このような深い実感は生まれなかったでしょう。その時、苦しみ悩みも私を育てるものと気づきます。

「この世のできごとは　何事も何事も　お念仏の助縁（じょえん）とおもうべし」という法語を改めて思いおこします。そうすると今年の桜を見るという出来事も、お念仏を称える尊いご縁、助縁となります。

お念仏を軸として、お念仏称えることにより、澄んでいく、気づかされる心の世界や生き方が恵まれます。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。